

コンシューマー運動の歴史¹

ゲイル・ブルーバード (Gayle Bluebird)

日本語訳：飯野 雄治²

歴史は過去、つまり先人たちやその偉業と私たちをつなぎます。近年、ピアスタッフ等として働く方は、その豊かな歴史を忘れかけているかもしれません。本稿の目的は、コンシューマー運動の初期を振り返り、ピアスタッフが現在、仕事としていることのルーツについて学ぶことです。道なき道をかき分けてきた先駆者たちに敬意を払うべき時代であり、そうすることで私たちはそこから学び、さらに旅を続けることができるでしょう。

1970年代にコンシューマー運動の歴史は始まり、数多くの先駆者たちがアドボカシーを実践してきました。その中で一番有名なのは、「わが魂にあうまで」を書いたClifford Beersでしょう。この本により彼は最終的には全米メンタルヘルス協会の設立まで導きました。黒人人権運動、女性の参政権運動、身体障害者運動、ゲイ運動などの市民権運動の努力が結集し始めた1970年代に、現在のコンシューマー活動に直接、関係する歴史が始まります。

大きな精神科病院の脱施設化は、本人が望まない入院を最小化すべく法律が制定された1960年代後半に始まります。お互いの活動を知らないながらも元患者同士が知り合い、全米の各地域にグループを形成し始めたのは、このときです。リビング、教会、地域センターに集い、自分たちに有害なシステムに対し怒りを語り合いました。その多くは、電気ショック療法やインスリン療法³を強要された方たちでした。隔離病棟の利用や身体拘束は一般的に行われており、現在も一部の病院では続いています。施設の中で死んでいった人はたくさん目撃されました。また、公立病院で精神疾患患者がただ働きさせられたり、行動を管理するため凍った座布団に座らされたりする病院もあった時代です。

同性愛者や社会的逸脱行動を取る者は診断され、精神疾患患者として病院送りにされました。1974年になりようやく、全米のゲイ運動の政治活動によりアメリカ精神医学会は**精神障害の診断と統計手引き (DSM)**から**同性愛**を除外します。私たちの運動は、同性愛だと社会から傷つけられてきた人々を仲間に迎えました。この分野のリーダーMark Davisは、ユーモア交じりに「タグをぶら下げた女装 (Drag with a Tag) 運動」という言葉を用いました。

何らかの診断名を付けられた元患者たちはみな、人間でなくなってしまったように感じ、多くはずっと精神疾患と付き合わなければならず、二度とリカバリーできないと説明されてきました。精神医療に登場するあらゆる概念を拒否する彼らの当初の目的は**精神保健システムの再構築**でなく、解放運動の創設であり、精神保健システムを終わらせることでした。彼らを定義するのによく使用される言葉は、**出院者 (ex-inmate)**です。

これらグループの方針はラディカルで、戦闘的な抗議が行われました。しかし、声で戦おうという運動が強まる中で、個人的かつ相互的な援助と定義されるセルフヘルプや援助的サービスの必要性に焦点を当てた主張者の間から同じように強い声がありました。元患者運営によるオルタナティブという概念は、同時期に出来上がりました。

¹本稿は、ナショナル・エンパワメント・センターのウェブサイトに掲載されている Gayle Bluebird 執筆の記事(<http://nationalempowermentcenter.com/downloads/HistoryOfTheConsumerMovement.pdf>)の全訳です。翻訳にあたり松田博幸准教授 (大阪府立大学) にご協力いただきました。この場を借りて、お礼申し上げます。

² ピアスタッフネットワーク、リカバリーキャラバン隊、減薬サポート情報センター、稲城市福祉部

³ インスリンを注射し、低血糖による昏睡状態を起こすという統合失調症に対するショック療法

組織化された最初のグループは1970年設立のポートランドの**精神病者解放戦線**で、続いて1971年にはニューヨークの**精神疾患患者解放プロジェクト**、ボストンの**精神疾患患者解放戦線**、1972年には**精神科虐待に反対するネットワーク**と続きます(Chamberlin, 1990)。これらは精神科病院やアメリカ精神医学会の大会でデモ活動も行い、「人の鎖」で大会の参加者を阻止したことも1度あります。他にはカルフォルニア州知事Jerry Brownのオフィスで1ヶ月以上泊り込みのデモをしたこともあります。約30人が占拠し、要求を聴いてもらえるまで動きませんでした。最大のテーマは患者の使役と施設内での不明死のことで、電気ショックを採用する病院でも抗議が起こり、多くの都市で反精神医学の大会を主催しデモ行進が行われ、そこには反精神医学をスローガンにした歌、シュプレヒコール、手作りの看板がありました。

初期の抗議活動は全米規模のニュースレターや大会への参加という手段で情報交換することで始まります。**精神病ネットワークニュース(新規投稿はすべて認める)**ことで特徴的だった)が10年以上、サンフランシスコで発行され、国内外に読者がいました。ニュースレターは読者に「はけ口」を提供し、自身の物語や政治的理論が共有されました。詩や絵画は毎号に掲載され、過激ではありましたが強く心に訴え、現に存在する政治的課題を露呈させました。

精神医療による弾圧に対する人権と名付けられた年に1回の大会が全国各地で開催され、その多くは大学構内や野外の集会場で行われました。第1回は1972年にデトロイトで開催され、参加者はバス、ヒッチハイク、あるいは満員の車に乗りやってきました。その大会がネットワークを作り、政治的戦略を共有する貴重な機会だったため、多くが生活保護や年金でかろうじて生活し、それ以外に収入がなかったにも関わらず、何とかやってくる方法をみな見つけたのです。この大会の初期の有意義な成果の一つは、現在でいう患者の権利に近い、権利章典が作られたことです。深夜まで問題や価値観について議論されました。政府から財源を得るべきか、入院歴ない患者も仲間に入れるべきか、共感してくれる専門職にも会議を公開すべきかといった難しいテーマも話し合われました。

初期の団体運営者の1人であるJudi Chamberlinは、他の市民権運動と自らの運動を比較して次のように説明します。「一般に団体の方針には、自分たちによる定義付けや自己決定が含まれていました。黒人は白人には自分たちの経験は理解できないと考え、女性も男性に対し、同性愛者も異性愛者に対し同様に考えていました。そして団体が成熟するにつれ自己定義することから、自分たちを優先することへと移行しました。つながり始めた精神疾患患者にとっても、これら各運動の方針は等しい価値がありました。「精神疾患」に対する自分たちの見方は一般人のそれとは全く異なり、ましてや専門職のそれとは正反対でした。だから、患者経験のない人々を元患者から成る団体に入れて、団体の目標に影響を及ぼせるようにはしないことが賢明だと思われました」(Chamberlin, 1990)

運動としては平等主義を尊重していますが、リーダーなるものが出現します。Judi Chamberlinは2010年に亡くなりますが、運動の母として記憶に残りました。Sally Zinmanは現在もカルフォルニアで活動しています。Howie the Harpは現在、亡くなっていますが、ニューヨークで団体を初めて、後に西海岸に移りました。Su and Dennis Buddはカンザスで、George Ebertはニューヨークのシラキュースにある精神患者連盟でまだ活動しています。

運動が発展し変化する中で、リーダーの多くは政策決定の委員の座に就き発言の機会を得て、ドロップインセンターやオルタナティブに予算をつけていきます。活動家の一部はそれらと距離を取り続け、運動の発展に参加しませんでした。サンフランシスコの**反精神科医療の暴力ネットワーク**の創設者の一人であるLeonard Frankがその一例です。彼は代わりに「**ショック療法の歴史**」という本を書く道を選び、その後も様々なテーマで執筆を続け、それらは参考図書として活用されています。

1978年には歴史的名著「**精神病患者自らの手で：今までの保健・医療・福祉に代わる試み**」が刊行されます。Judi Chamberlinによって書かれた本書は広く読まれ、再版を繰り返し、今なお元患者が運営するオルタナティブ発展のバイブルになっています。重要な原則の1つとして彼女は、オルタナティブは独立していて、利用者の手で運営されるべきだと推奨します。

1980年は過渡期でした。政府は元患者たちが集い、財源なく単独で、援助とは別のプログラム運営を成功させていることを認め出しました。国立精神衛生研究所の地域サポートプログラムは、これらオルタナティブに予算をつけ始めます。

1983年**メリーランドの「自らの手」**が、初めて州の予算で設置されます。続いて1985年にバークレイ・ドロップインセンター、1985年にマサチューセッツ州のケンブリッジでルビー・ロジャース・ドロップインセンター、1986年にカリフォルニア州オークランドでオークランド自立サポート・センターと設立されます。バークレイのドロップインセンターは現在でも運営されており、メリーランドの「自らの手」は州規模に広がり、様々なプログラムを持っています。

1986年にSally Zinman、Howie The Harp、Su And Dennis Buddの3人はアメリカ連邦保健省薬物依存精神保健サービス部（SAMHSA）の予算を使い、初めてのマニュアルを作ります。「すみずみまで（*Reaching Across*）」はセルフヘルプとそのグループの運営方法に関する情報を掲載しました。サポートグループに関する章でHowie the Harpは、援助の提供方法についてピアと専門職との違いを説明します。「サポートと治療は異なります」と彼は述べ、「サポートにおいてゴールになるのは、心地よいこと、友人をケアする人となれること、共通した経験を聴き、シェアできることです。一方で治療的關係では患者は考え方や行動の仕方を変えるよう求められます。」

再び国立精神衛生研究所の地域サポートプログラムの予算により、1985年にバルチモアで第1回オルタナティブ会議が開催されます。このときまで精神疾患について様々な見方がありましたが、強制的な治療には反対するものの医療モデルに完全に反対するわけではないという中立的な視点もありました。

300人以上が参加した大会では、自分たちの呼び方についてもめめました。結局は、**コンシューマー（消費者）**という語が採用されましたが、それだとサービスや治療を患者が選択したという意味になります。今なお、**サバイバー（生存者）**という言葉も主張する方もいますが、その場合は病気というより精神保健システムを生き抜いてきたという意味となります。この呼び方の問題に結論は出ませんでした。コンシューマーが適切だと考えた人はいませんでしたが、それに代わって受け入れられる言葉は見つかりませんでした。

1985年をもって**精神病ネットワークニュース**は廃刊となり、闘争派は減少します。抑圧に対する人権会議もその年に最後を迎え、穏健な立場が運動の主流となり始めます。

1986年、公立精神科病院での虐待・ネグレクトの調査報告、患者の権利侵害の発覚などが続き、「精神疾患患者のアドボカシー法」が成立します。この法律で障害者権利擁護団体が、精神病施設にいるすべての精神疾患患者や一部地域生活患者に対する虐待、ネグレクト、法的権利の侵害の状況について調査するよう予算措置されました。活動家の多くは、州の同法プログラムの委員会の座につき、現在も続いています。

1988年には、アメリカ連邦保健省薬物依存精神保健サービス部（SAMHSA）により13のセルフヘルプグループのプログラムが実施されました。これらは成功したのですが、予算廃止と同時に終了しました。

政策決定の座につく患者やコンシューマーはさらに増え、言葉はネガティブなものからポジティブなものに変わりました。闘争派の活動は、抵抗するためのデモ隊を結成することでなく、変化を求めて強く意見することに変わっていきました。

1990年代には、新たなコンシューマーグループがたくさん生まれます。Joe Rogersを代表とす

るセルフヘルプ情報センター、医師Dan Fisherを代表とするナショナル・エンパワメント・センターという全米規模の2つの技術的援助機関が設立されます。コンシューマー担当事務所が各州の精神保健部に設置され、コンシューマー運営のオルタナティブプログラムは大きく成長します。ボストンの精神科リハビリテーションのディレクターBill Anthonyは「リカバリーの10年」と表現しました。

2000年代には、ピアが精神保健システムのあらゆる領域に登場するまでに拡大しているのが見て取れます。ピアスペシャリストは全国のあちこちでトレーニングされ、コミュニティ及び入院施設で働いています。クライシス期へ対応するオルタナティブが作られつつあり、最初の頃に作られたものの1つがアリゾナ州フェニックスで作られた「リビング・ルーム」です。研修はインターネットや実地研修プログラムで提供されています。オルタナティブ大会は25周年を迎え、アドボカシー/活動家に焦点を当てたものから、幸せとピアサポートの構築・促進スキルを目標としたものへ変化しました。

Pat DeganとLarry Fricksが全米規模の活動をコーディネートしながら、数え切れない数の墓石が立て直されました⁴。

全米規模の組織、全米精神保健連合が設立され、Lauren Spiroを代表として州規模で、団体と個人に対してアドボカシーと政策開発が実施されています。歴史はまだ続いています。将来に期待することは、現在では妄想と呼ばれそうなことです。それは、あらゆる政策決定の次元で精神医療の歴史に詳しい人を配置し、精神保健機関や施設の様々な階層でそのような人を雇用するという戦略を実行に移すことです。精神疾患がある人が社会に歓迎され、職場や人それぞれの生活の場の一員となり、地域において自分の家あるいは支援付き住居で生活する時代が来るのを私たちは夢見ています。私たちが皆でともに活動すれば、やがて、施設は要らなくなるでしょう。やるべきことはまだあります。私たちの活動が繰り広げられ続けるにつれて、パートナーシップを結んで一緒に働く仲間は、サービスを利用する人、家族、サービス提供者、コンシューマー/サバイバー、そして友人へと広まっていくでしょう。

参考文献

- Beers.C.(1953):わが魂にあうまで
- Chamberlin,J.(1979): 精神病患者自らの手で：今までの保健・医療・福祉に代わる試み
- Chamberlin.J.(1990):元患者運動～私たちはどこから来て、どこへ向かうのか～
<http://power2u.org/articles/hisotry---project/ex---patients.html>
- Zinman, Bluebird, Budd: 精神保健分野におけるコンシューマー運動の歴史(2009)
<http://promoteacceptance.samhsa.gov/teleconferences/archive/training/teleconference12172009.aspx>
- さらにコンシューマー運動の歴史に興味のある方は、こちらへどうぞ
www.mindfreedom.org
<http://power2u.org/>

⁴ 2人は、全国の州立病院にある、見捨てられ、荒れ果てた、患者の墓を修復する活動を行っており、さまざまな州で展開されています。詳しくは、下記を参照ください。

<http://www.power2u.org/articles/history-project/how.html>